

外国人居住者の地域社会における居場所と共生に関する研究

-横浜市中区の在日タイ人集住地区を事例として-

Study on whereabouts and symbiosis for foreign residents

: a case study centering on densely settled area for Thai

学籍番号 47-136751

氏名 高橋 育 (Takahashi, Iku)

指導教員 高橋 孝明 教授

1 章 序

1.1 研究の背景と目的

1990年代以降入管法改正により、日本の外国人人口は増加し、社会的な背景からも今後増加することが予想される。外国人が集住するエスニックタウンはエスニック同士のネットワークを用いる事で特定地域に形成されるが、日本におけるエスニックコミュニティの発展は日本人と外国人居住者とのセグリゲーションを招きかねない。その結果として、外国人が必要な情報を得られず生活に支障をきたすという問題や日本人と外国人の間での軋轢により相互の生活に悪影響を及ぼす現状がある。そこで本研究は、調査対象であるタイ人の居場所を通して日本での生活の意識を明らかにし、共生という観点から日本人、タイ人双方へのヒアリング調査を通して対象地における共生の現状を把握し、在り方について考察することを目的としている。

1.2 対象地の対象

本研究は横浜市中区のタイ人集住地区である、伊勢佐木町、長者町、若葉町、末吉町を中心とした関外地区を対象地とする。関外地区とは横浜市中区伊勢佐木町を中心とする26の町を総称した約120haの地域

のことを指す。1867年に遊郭地が関外地区に移転して以来、明治、大正、昭和を経てもなお、風俗店や飲食店で賑わう地域となっている。1980年代後半、東南アジアからの出稼ぎ労働者が急増した地域である。横浜市中区のタイ人コミュニティを選定した理由は、横浜市では行政レベルで「多文化共生」を掲げた政策や、外国人実態調査などが行われているが、それらは韓国・朝鮮人、中国人、フィリピン人を対象としたものが多数であり、タイ人に焦点を当てたものが少ないことである。また対象地においてタイ人の場合、地域においてコミュニティの拠点となるような宗教施設などは存在せず、日本人との関わりを持つ場面は少ない現状があることから今回はタイ人コミュニティに着目し、地域との関わり方、日本人とタイ人との関係を明らかにし、共生の在り方を考察する。

1.3 調査方法

- ・人口、店舗数の動向と地元住民のヒアリング、文献調査から地域を捉える
- ・実地調査から詳細な状況を明らかにする
- ・外国人住民へのヒアリングにより、対象地における居場所と生活に関する状況を明らかにする

るかどうかが大切であると述べており、店を安心できる場所とするため、上記で述べたような装飾をすることに繋がっていると考えられる。これは装飾が「自己への欲求」を満たす役割を果たしていると考えられる。

また国旗や屋根等の装飾については「タイの店であると分かるように」ということが意図されていた。また、タイ店舗では店先に日本語のメニューを掲示したり、日本語や中国語の宣伝文句を用いる様子が見受けられ、日本人、さらには地域にすむ他の外国人向けのメッセージであるといえる。これは装飾が「他者へのアピール」という役割を果たしていると考えられる。

5章 タイ人コミュニティの現状と課題

5.1 タイ人と日本人の接触不足

ヒアリングを通して、店にいる時間が多く、出掛けることが少ないことが明らかになったが、店での滞在時間の長さが居心地の良さを求めることに繋がっていると考えられる。居場所に関する質問では、「自宅と店の往復である」という回答が非常に多く、地域への関心が非常に低い様子が見受けられ、日本人との接触が少ないことが明らかになった。日本人側の意識としては、町内会費の支払いや、ごみ、騒音について問題視している様子が明らかとなり、コミュニケーション不足が露呈されていた。

6章 多文化共生をめざして

対象地において両者が共生していくためには接触不足を解消していく必要があるという考えに至った。

6.1 接触仮説の四条件

これまでの調査からタイ人と日本人の接触不足が明らかになったが、オルポートの「接触仮説」を整理した R ブラウンは「制

度的なサポート」「接触の十分な頻度と密度」「協同活動」「できるだけ対等な地位」の四つの条件を満たした接触により、両集団の理解が形成されると述べている。タイ人と日本人（若葉町町内会、長者町町内会）双方へのヒアリングを通してこの四条件に基づき考察を行った。

「制度的なサポート」に関しては、タイ人の場合には、アクセスのしにくさがうかがえた。知人や親族に頼って情報を得ている現状であり、特に困るという声はきかなかったが、将来的に行政のサポートをたよりにしなければならない局面が発生する可能性は十分に考えられる。「接触の十分な頻度と密度」については挨拶すら交わしていないという状況が見受けられた。要因としてはタイ人の行動範囲が限られていること、生活の時間帯が異なることが予想される。R ブラウン（1999）は接触仮説の条件の中で「接触の十分な頻度と密度」が最も重要な条件であることを示唆しているが、対象地における日本人とタイ人との接触は極めて低いといえる。「協同活動」に関しては、若葉町町内会の場合には積極的な参加がみられるということであり、日本人の意識によって大きく左右されるのではないかといえる。また日常的に顔を合わすことができない状況であることから、協同活動を通して接触の機会を増やすことが鍵となるのではないだろうか。「できるだけ対等な地位」については、日本人とタイ人の間にはほぼ達成できている状態にあるといえる。2005年以降の取り締まりにより不法滞在の外国人はいなくなったという意識が広がっており、「タイ人＝不法滞在」という意識はほとんどなくなっているようであった。

制度的なサポート	接触の十分な頻度と密度	できるだけ対等な地位	協同活動
×	×	○	△
・タイ人向けのサポートの不存在 ・支援活動の情報不足	・生活行動範囲の違い ・生活時間帯の違い		・町内会費の徴収の難しさ
↓	↓		↓
・情報の周知	・タイ店舗への日本人受け入れ		・日本人の意識の変化 ・双方に益のある活動

6.2 事例研究-若葉町における「協同活動」の可能性-

本節では対象地における「協同活動」に焦点をあて、考察を行う。協同活動に関して R ブラウン (1999) は、別々の集団の成員が、どちらにも有益な何らかの目標の達成の為に依存し合っていれば、両集団は友好的な関係を持たざるを得ないとしている。横浜市中区若葉町におけるそのような活動の可能性について考察を行う。

(1) よこはま若葉町多文化映画祭

若葉町にある映画館「シネマジャックアンドベティ」では「ART LAB OVA」という任意団体と共にアジアの映画と食文化を通じて地域の日本人にアジアの文化を広める、交流を深めることを目的とした映画祭を開催している。韓国人や中国人以外にタイ人やフィリピン人といった東南アジアの人々が多く住んでいることを町の特徴として肯定的に捉えている。風俗店が建ち並んでいるというイメージにより、これまで良い印象を持たれる街ではなかった若葉町のイメージに対して、肯定的な見方を見出していることは若葉町にとって非常に意義のあることであると考えられる。

(2) 横浜下町若葉町マップ制作

若葉町町内会、シネマジャックアンドベティ、中区役所、NPO 団体により制作されたマップである。若葉町のエスニックタウンという要素を肯定的に捉え、新たな魅力として発信するという試みである。

これらの活動を受け、地元町内会の若手

も新たな動きを見せるようになった。以下で述べる ABY の試みである。

(3) 町内会若手集団 ABY の試み

ABY とは商店街の若手有志や学生などが中心となった集団であり、2006 年から伊勢佐木町・若葉町と周辺の地域に関する様々な話題やお店の情報を発信するブログの運営、イベントの企画などを行っている。設立の動機は地域住民同士の関係が希薄化していることに問題意識を抱いたからであり、また地域住民の中で定住する外国人が増加し、無視できない存在になってきたという思いから、ブログでは「タイタウン」という言葉を用いて、外国人住民を「地域を盛り上げる為の一員」として捉え積極的な関わりを持とうという姿勢が見られた。そしてこのような若手の動きを知った町内会の人々もこれに後押しされるように「外国人住民と共栄共存していきたい」という声が出るようになった。

タイ人たちからも「街に人が減った」という声が数多く挙がり、街の衰退を危惧している様子が見られ、日本人とこれまであまり接触のなかったタイ人たちが協力しあい、町興しをするということが「協同活動」の第一歩ではないかと考える。

7章 まとめ

在日タイ人が、日本社会との接触が不利であり、行政的なサポートが受けにくい集団であるということから、これまで焦点の当てられなかった集団間の課題を明らかにしたといった意味で本研究は意義のあるものになったのではないかと考える。調査を通して外国人居住者の地域社会への参加の重要性を再確認したとともに、課題の発見へと繋がった。